

「最後の審判」とは、世界の歴史が終わる時に下される審判のことです。聖書の中には「最後の審判」という言葉は出てきませんが、マタイによる福音書 25 章 31～46 節やヨハネの黙示録を読むと、「主の日」、「裁きの日」という表現で登場します。

ミケランジェロの絵画にもあるように、最後の審判は恐ろしいイメージで捉えられていました。わたしたちの中にも、善い行いをしていれば天国に行けるけれども、悪いことばかりしていると地獄に落とされるという考え方があると思います。

確かに聖書を読んでいくと、神さまに背き、その戒めを守ることのできない人間の姿が多く描かれています。また旧約聖書の中には、神さまが手を下し、罪や悪を罰する場面もあります。

その恐れから、人々は必死に律法を守り、神さまの前に正しい者であろうとしました。新約聖書に出てくるファリサイ派の人々は、自分の力で神さまの前に立てる者になろうとしていました。

しかし、わたしたちの普段の姿を思い返してください。わたしたちは思いや言葉で、幾度となく神さまが悲しまれるようなことをしていませんか。このままでは誰一人、裁きを免れることはできないのが現実です。

神さまはそれを望まれません。「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」に、イエス様を遣わされたのです。

イエス様によってわたしたちと神さまとの関係は修復され、わたしたちが再び神さまの方に向き直ることができます。そして最後の審判は裁きではなく、永遠の命へと導いてくれる希望と変えられるのです。

次回は「最後の晩餐」です。お楽しみに。



「最後の審判」

ミケランジェロ・ブオナローティ

(1475～1564 年)

ただ残っているのは、審判と敵対する者たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れつつ待つことだけです。

(ヘブライの信徒への手紙 10 章 27 節)

